

12月17日

Copyright: Takumin

絶対王権は制度的には絶対的であるが、実際は制限されていた。ところがフランスの革命期にこの制限がなくなる。人民主権の原理が主張された。人民主権とは主権者が人民に存するという事。主権とは最高の立法権、あるいは司法権。人民が主権者となり、次のような変化が生じる。正当性原理の変化。第一に臣民と支配者の区別がなくなる。これは一般にいいことといわれるが危険な側面もある。それは人民が支配者であるということは人民が自分を支配するということになる。そうするとそれを制限するロジックがなくなる。人民が自ら統治するならば、それを制限するロジックがなくなり、新に無制限的な権力が生まれる。近代国家は人民主権を主張したとしてもそれを直接的な形で実現することはできない。よって必然的に代表性を導入することになる。すると代表するものと代表されるものの二つのグループが生じる。代表する物はされるものによって選出されるので、される者の意思を体現するということになる。よって支配者と被治者は同一となる。しかし、現実とはそうではなく、代表者は恣意的に権力を行使するようになる。しかも国民の名において行うのだからそれに対抗する権力がなくなる。ナポレオンが無制限的な権力を掌握したのもそのためである。自らの権力をチェックする他の権力を認めなかったのだ。今度はこの政治権力を制限する必要が生まれてくる。自由主義者たちは何とかして人民主権を制限しようとする。絶対的な権力は危険だからである。ではリベラルたちはどのように権力、しかも人民主権を制限しようとしたのか。一つは歴史的な事実を訴えること。要するに権力は危険で、元来権力を人民の名において恣意的に使っていたと訴えることであったが、ロジックとしては弱かった。彼らは人民の真の代表者ではなかった、清の代表者は正しく権力を行使できると反論された。そこでリベラルは異なる理論を持ってくる。社会学的方法を用いることによって幾何学的なロジックに対抗した。それは現象のパターンを析出するという理論。様々な矛盾が含まれているが、なぜかそうなるというもの。その最たるものが三権分立。ロジックとしてはナンセンスであるが、結果的に人権が最も保障される。過程は説明できないが、理由は保全される、こういった因果関係ではなく、相関関係をモンテスキューは明らかにしようとする。モンテスキューの理論にも問題が含まれている。彼は権力制限の担い手として貴族を想定していた。ここが彼の限界であり、アナクロニズムであった。なぜ貴族が王権を制限できるかという、貴族は権力を持っているからであり、その権力は名誉心というものが支えている。よって王権に対抗できると考えた。しかし、フランス革命によって身分社会は消滅し、新たな国家社会が創造された。よってリベラルの課題はいかにして人民主権を制限するかということであった。今日の自由民主主義国家はそのようにデザインされている。どのように分立するかが重要になってくる。分離によって自由を保障し、秩序を維持することが重要になってくる。そのことを分離の組織化ということができる。分離にはほかにもある。まず国家と社会の分離。公私の区分。国家と宗教の分離。代表するものとされるものの分離。労働分業。このようにさまざまな分離が近代社会では重視される。ではなぜ分離が存在するのに社会が分裂しないのか。その点をリベラルは説明せねばならない。人民主権が重要であるということは言うまでもないが、それと表裏一体の関係にある一般意思というものをどのように扱うかが大問題となる。主権があつて、一般意思を社会で実現させる必要がある。問題はこれをだれが代表するかである。これは人民主権論に

共通する重要な問いである。いまさらフランス革命後に身分制を擁護する人たちはほとんどいなかった。基本的にリパブリカンたちは一般意思の中心性を擁護した。しかし、これを万人が認めたからと言って一つの政治理論が帰結するわけではない。大半のアクターは代議制を導入せざるを得ないと考えたのであるが、だれがいかなる資格において代表するかで意見が分かれた。フランスの場合はその問題を解決できない故に政治的システムがいつまでも安定化しなかった。フランス革命以降フランスでは憲法が 15 回変わっている。候補はたくさん存在する。法が処刑されるまでは王も一般意思の代表者とみなすことは可能であった。それとは別に議会が一般意思を体现する、あるいは議会外の勢力が体现することも可能であった。例えばフランスでは公安委員会、イギリスでは軍隊が主張した。どのグループが正当な代表者かがなかなか決まらなかった。このように問題を立てると永遠に解決しない。要するに多様なアクターが自らこそが一般意思の体现者であると主張するのであるから、それをうまくまとめる原理は出てこない。ではどうするのか。フランスのリベラルの思想家たちは鋭い意見を提示する。一般意思という原理にこだわってはいけなと彼らは主張する。人民主権は重要であるが一般意思は危険であると主張した。彼らが何に注目したのかというと common interest(共通利益)であった。これを重視すると一般意思を主張する場合にはだれが決定者かが問題となった。政治権力をだれが掌握するかということが最も重要な課題であったのだが、リベラルは政治権力から離れた社会に注目する。人民主権にとって最も重要なのは社会における利益であると彼らは考えた。その利益とは個人の自由と権利であると主張した。大半の近代人は自らの私的な自由や権利を何よりも尊ぶとし、彼らにとっての最大の関心事はその詩的自由・権利の保全ということになる。それが共通利益であると主張する。代表者たちと私的利益の追求に従事する人たちに分かれる。ようするに経済活動に従事する人たち、今日の社会では基本的に国民は経済活動に従事しているから彼らにとっての最大の関心事はそういった私的利益の追求の保証ということになる。それが共通した利益だからそれを保証すればいい。その際に皆が政治に参加しなくてもよいということになるし、むしろしない方がいい。なぜなら、政治的能力を有している能力は常にマイノリティーであるためである。これがリベラルなデモクラシーの考え。要するに国民は基本的に自分の私的利益を追求する。自分に向いた経済活動を営む。パン屋さんならパンを、大工なら家を。それによって結果的に共通善が実現するとしたのがアダムスミスである。アンシャンレジーム期には意思が統一せねばならない、皆が有徳でなければならないという考えがあり、大半の人たちは無知であるから一方的に支配されればよいと考えられたが、近代では徳や共通善は皆が求める必要がないということになる。それらはマイノリティーのエリートがやればよい。それによって結果的に共通善が生じる。しかし、私的利益の追求だけしかないということにも問題があると主張する。国民の政治意識が低すぎると政治権力が暴走することになる、恣意的に支配することになるからである。彼らをチェックするためにはある程度政治に関心を持たねばならない。このモデルが果たして正しいのかどうかというもんがいだ生じてくる。政治家が政治に専念し、秩序と平和を維持し、そのシステムの中で国民が経済活動に従事するというモデルはうまくいかないと最悪の事態が生じる。一つは政治の暴走。もう一つは経済の機能不全。問題はこのシステムを維持するための前提条件は何であることを明らかにすることである。

リベラルは実現可能な権力を実現するためには制限されていなければならないと主張したということを前回やった。ただ重要なのはどっちが国民に支持されるかであった。彼らの理論が成り立つにはいくつかの前提条件が必要である。まず人権を尊ぶというメンタリティーがあるということ。そうすれば人権を尊ぶ政治家が選ばれ、それが国民に支持され、権力が安定的に供給されることになる。ということでリベラルはロジカルな一貫性を追求するだけでなく、国民のメンタリティー、エートスを重視する。モンテスキューはこれらを一般政治と呼んだ。絶対的な原理が存在するのではなく、政治の原理は常に変容する。コンテキストが変われば政治原理も変容すると初めて主張したのが彼であった。その考えをリベラルが継承する。社会的な条件にリベラルは注目し、それが彼らの最大の知的貢献であった。政治システムが成立するための環境、コンテキスト、社会的状況、精神的状況を重視することによって政治権力の性格と限界を検証する。